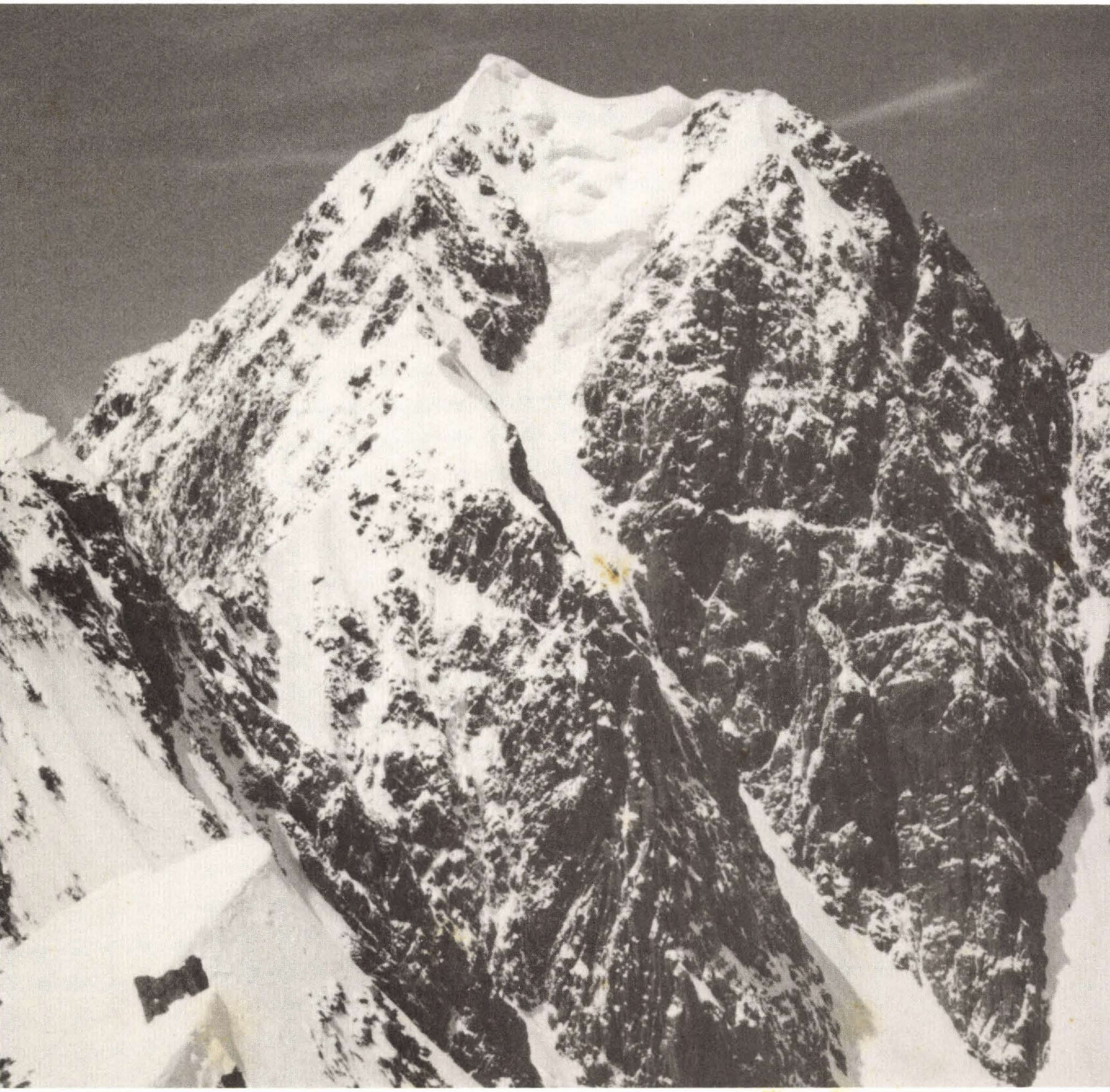
針葉樹会報

1986. 5.　第66号



表紙写真説明

C2から見たボゴダ峰

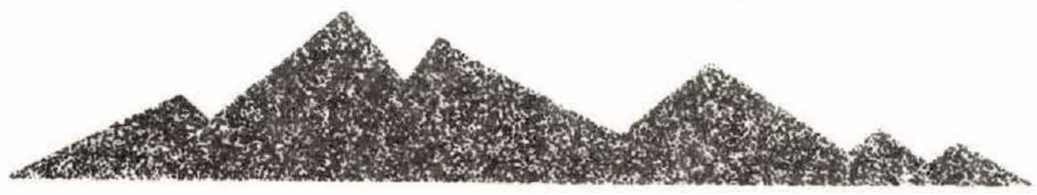
（引地　真氏撮影）

発行日
１９８６年5月１９日
発行所
針葉樹会
印刷所
篠田印刷

針葉樹会報

第66号

編集人
〒２７３　船橋市前貝塚町
２６６－３
宮下克彦



—目　次—

部報と会報あれこれ　山本健一郎……2
OB山行（北八ケ岳）　石原脩……6
僕が休暇中にやった事　引地真……8
第一回　内モンゴル
第二回　ボゴダ峰
第三回　チベット

部報と会報あれこれ

山本健一郎

会報六五号を手にしてまず吉沢さんの「五八年前の記事」が眼についたので、早速手許のガリ版の東京商科大学一橋山岳部部報一号をひっぱり出して見た。吉沢さんの三月の蔵王、五十嵐さんの野沢スキー合宿記、そして吉沢さんの五色スキー小倉だよりなどの記事のほか、巻末に部員名簿があって三五名を数える大世帯だったことから当時の山岳部の隆盛ぶりがしのばれる。これは針葉樹の第一号に数えられ、復刻版に入れられることとなったので皆様のお眼にふれる機会もあるかと思うが、戦前の部報と針葉樹会報をふとした機会に手に入れたので、折を見てすこしづつご紹介しようと筆をとった次第。この部報一号は一九二五年十一月から二六年四月までの記録をまとめたもののようで部員住所録に大正一五年四月末日調とあるから、同年五月に発刊されたものと考えられる。

部報の二号は大分後になり、昭和五年十月に増山さんの編集で七〇頁の立派なものが刊行されたが、その巻頭に中島さんが、此度部報第二号を作って部員及び針葉樹会員に頒つ事になった。第二号とした所に、新しい人達にはちょっと不思議に考える方もあるかも知れないが、大正十五年の春一度出たきりで全く忘れられていた「東京商科大学一橋山岳部部報」第一号のあとを受けて、先輩諸兄の計画を復活させたに過ぎない。

元来、機関誌「針葉樹」はあっても、部員全部が部の最も近い活動を知るためには少し間が遠すぎる。編集方針としたって、そうそう部員本位にも行くまい。要は部員全体に部の活動を知らせたい為、此の部報は生まれたのだ。（原文のまま）

と発刊の理由を書いておられる。

この部報は昭和六年一月二十三日に第三号が増山さんの編集で、同じ昭和六年五月八日小川さんの編集で第四号、そして七月五日に鈴木さんの手による第五号、十一月二十五日には大友さんの編集で第六号と続けて出ており当時の山岳部の充実ぶりを眼のあたり見る思いがするが、小生の手に入れたのはこれだけで、部報の発行がその後どうなったのかは増山先輩にでもお教えいただくしかないであろう。

一方、戦後復刊となり今までの歴代の幹事のご努力で発行が続けられている針葉樹会報は、松木さんの編集で昭和五年の四月に発行された様であるが。巻末部室欄に、編集の松木さんから学校の様子を書けとのご命令によって……のくだりがありその日付が、五・四・七とあるところから見当がつくが、この記念すべき第一号の最初の記事は何と「本体は何れ」と題し金ボタンが背広に変わっても狸という呼称は変わらず、本体は何れであるかわからなくなってきたという面白い記事であるが、そう言われただけでこの執筆者が大先輩の誰かは若い会員の方々にはピンとこないか

も知れない。そして、それを受けて松尾さの「本体はいずれなりや」に関する認識方法に就いての科学的説明の一端という、腹をかかえて笑い出さざるを得ない一文が続いている。

ペンチャンの論文の結論に曰く

此処に一匹の狸がいたとする。二十数年間人間の間に住み、顔付声色全く人間に真似する様に馴らされて来たとするも、誰かその狸を目して人間と言い得ようか。（原文のまま）

会報に健筆をふるい、長い間の山登りでも名コンビであった両先輩の針葉樹会報でのご活躍は第一号からはじまっている。

また、熊さん山の本を著わす。その中に、汽車の中で何処かの婆さんが「こちらから東京へ稼ぎに行くのは多いが東京から来るのは珍らしい」と言って感心していた、とある。

登山姿が珍らしいと見えてなんて言い訳をしているけれど、どう考えてもこの婆さんの観察の方が当っているらしい。（佐美太郎）

というくだりもあり、部報の二号の記録にも良く顔を出しておられる浦松さんが寄稿されたものの様である。尚、熊さんとは吉沢一郎さんのことであることを若手O・B・のためにつけ加えておこう。

この会報を読んでいくと中川孫さんが、関西よりかけつけ、針葉樹会の家族大会に（昭十一年四月二十九日のこと）出ようとして仲々一行に追いつけず御岳のケーブルでスレちがってしまうくだり、あるいは近藤さんが大牟田に転勤するに際してのペンチャンの「近ちゃんを送る言葉」十誡、黒田さんの筆になる関西針葉樹会別府大会の記録などいずれも当時の諸先輩方のご活躍ぶりがうかがわれる面白い記事なので、折を見てご紹介しよう。

小生昨年の山行は、雨飾山、高妻山、神奈山など、今年に入り四阿山敗退、八甲田山、岩木山に登りましたが、それより面白かろうと手許の古い会報をご紹介するとともに、あらためて会報に達筆をふるっておられた村尾大先輩のご冥福をお祈りします。

＜山本O・Bより「近ちゃんを送る言葉」のコピーを送付頂きましたので、ここに掲載させて頂きます＞

近ちゃんを送る言葉

PEN

近ちゃんが遠い所に行く。昔ならば太宰府の向うと云う所だ。闘君のロンドンや河相君のメルボルンに次いで遠い所だ。

落ち行く先きは九州三池と言えば心細いが、是は近ちゃんにとっては目出度い栄転なのである。近ちゃんは今重役街道に一足踏みこんだ所だ。唯直すぐにその道を進めば行途に輝く栄光がある。だから僕達には淋しいが近ちゃんの為を思えば嬉しい。

嬉しいには嬉しいが僕にとっては都合の悪いことが色々ある。

夜遅く帰った時は近ちゃんと一しょでねと云う。その代り恩は忘れないで、スッカリ近藤に御馳走になったよと云う。これからはその手が使えなくなった。

山へ行く夜汽車で近ちゃんと並んで腰をかける。窮屈の様だがそうでもない。近ちゃんが例の優秀な空気枕をとり出して窓際によりかかって無邪気にスヤスヤとねると僕が近ちゃんによりかかる。洵にフックラ

とした好いクッションを提供してくれる。然したまたま逆作用で近ちゃんが僕によりかかると蟬に大木がとまった様でいとも悲惨な結果となる。これから夜汽車でも好いクッションがなくなった。

近ちゃんとエノケンや五九郎をよく見に行った。近ちゃんがエノケンの舞台を見つめている様子は非常に面白がって面白い。面白がってる近ちゃんを横で見てると何だかこちらもつり込まれて可笑しくなる。これからは舞台と近ちゃんの面白味の二重奏もなくなるわけだ。

近ちゃんの會の為を思い、部の人を思う至情は言わずもがな。みんなみんなシミジミと胸の底まで感じているだろうし、骨髄まで徹しているだろう。

手相論に至っては堂に入ったものである。当たる当たらぬかは紙一重であって、気の迷いを似て聞けば一から十まで当たった様だし、それに近ちゃんは一から十五までも当たった様に云うものだから聞いてる半信半疑の当人もスッカリ安心立命する。かくも人をたぶらかすの術は全く玄人はだしで恐ろしいものがある。

近ちゃんの色んな時、色んな処で起す錯覚や、豪勇や頓智はそれこそ数え切れない。昨年の暮の省線電車の閉りかかったドアエンジンを押し開いて入って来た武勇伝なども輝かしい記録の一つである。

近ちゃんの云う事は嘘ばかりである。とは誰も夢にも思ってはいない。

然し近ちゃんは決して嘘は云わない。と云うのも知ってる間では余り空々しいお世辞となる。だが近ちゃんの云う事は嘘でも本当でも決して罪が無い。と云えば誰も肯くだろう。これは近ちゃんの徳の至す所、人格の然らしむる所である。私が本誌に「本体論」を発表して以来幾星霜、遂に我れ、人共にその人格を認むるに至った近ちゃんの努力精進たるや涙ぐましいものである。

会うは別れの初めとか。近ちゃんと会ったのは何時の時か。ハッキリ覚えてないが、次から次への山旅の数々。そして最後の山旅が昨年の暮の黒菱行だったろうか。いや、お正月一日の夜たってもう一度黒菱へ行こうと約束した。そして元日の夜六時半頃リュックサックに荷を詰めてる時電話がかかって来た。奥さんからで今日はスッカリ酩酊して唯今前後不覚ですと云う。二日の晩たって来ると思って僕一人混んだ新宿の駅からたった。對山館によってこの間来た太った人が明日来るかも知れませんと云っていた。

二日午後黒菱着。

三日今日は来るかも知れぬと思って新雪を蹴って（と云うとうまい様だが例の金釘流のシュプールを描いて）細野スキー小舎まで下りた。待つ程に来ると思ったが来なかった。さては二日酔で立てなかったのかしら。

四日午前八方屋根に行ったが吹雪で帰って来てまだ早い。事によると来るかも知れぬと細野小舎まで下りた。矢張り来ない。これぢゃ奴さん三日酔かも知れないぞ。元日の前後不覚の近ちゃんの姿を思い浮べて

可笑しくて仕様がなかった。

近ちゃんは今度は一しょに行けなかったと云って恐縮してるが数ある山旅の中でも斯くも愉快な感銘を残したと思うと僕は一しょに行ったと同じ嬉しさがある。度々の山行の最後をこんな痛快な奇抜な思出でピリオドを打ってくれたのを僕は喜んでいる。

色々数え切れない話の種を残して近ちゃんが九州へ行く。その東京に於ける存在を失うと何だか大きな穴が開いた様で埋めきれない淋しさがある。

近ちゃんは十年位は帰って来ないそうだ。今度お江戸日本橋に帰って来る時は近ちゃんの人生の道中双六も「上り」に近づいた時であろう。例の競馬の大穴よりも、もっともっと私はそれを待ち望んでいる。

「近ちゃんを送る言葉」をクドクドと書き綴った非禮を許して貰って、別れに臨んで「近ちゃんに送る言葉」を十誡として餞としよう。

一、汝針葉樹会費を忘れると勿れ。子日く「自ら出でたるものは自らに還る」と。

二、汝山発の日は大酒してねるべからず。狸寝入ならばよし。

前後不覚とならば見送りの人の迷惑思うべきなり。

三、汝東京にてなしたる悪因に心せよ。悪果を未然に防ぐべきなり。江戸の敵を長崎でと云うことあり。

四、汝カクランに心せよ。カクランは人にも鬼にも起るものなり。

五、汝バカ貝を恐れよ。共食いは怖るべきなり。汝バカ鍋を食いてより胃酸過多症になりたるを忘れること勿れ。

六、汝貨物車に乗ること勿れ。汝にも人格なるものあるなり。

七、汝切符を落す勿れ。汝元来物を拾うに巧みなり。古語に日く、よく泳ぐものよく溺ると。心せよ。

八、人を見たら泥棒と思え。然して汝も人なり。故に自分を見たら泥棒と思え。

九、汝身体丈は大事にすべし。頭の方は今更何としても致し方なければなり。

十、汝人間たることを夢寝の間も忘れる勿れ。忘るれば忽ち術の破れる惧れあれ。父なる神の栄光永へに近ちゃんの上にあれ！

〈東京商科大学一橋山岳部部報二号より〉

OB山行（北八ケ岳）

石原　脩

六十一年三月二十一日、春分の日。六時四〇分新宿発、八時五分茅野着。バス四十分にケーブル八分を乗りついで、標高二千二百メートルの坪庭入口に到着した。

一行は山崎・石原の年輩組と米田・引地・山本の若手組の合計五人である。柿原・根本の両先輩が不参加となったので、気負っていた若手組は気が抜けたが、年輩組はペース・メーカーの重責を感じて緊張気味である。

開けた西面には、左から赤岳・北岳・木曽駒・御岳・乗鞍・穂高から爺までが並び、我々を迎えてくれた。

スパッツは有効だったが、ワカンは不要であった。歩きこまれた道は靴底が軋む締った雪質で、下山者にサラサラとステップを崩された後は少々歩きずらい。

午後一時に、最初のピークである縞枯山（二、三八六メートル）に着いた。積雪のお陰で、無雪期よりも見晴らしが良い。

陽当たりも良いので、小生は紙をサングラスで押えて「鼻プロテクター」をつけた。山崎さんは手拭いで顔の側面も保護している。若年組は陽焼け止めクリームを用いている。鼻の頭さえピカピカにしなければ、下界におりてもゴルフ焼けと大差はない。

次の茶臼山には、一時四十分着。東面に、鹿沢の山々・浅間山が高度感を持って連なり、秩父の山は深く、日航機墜落現場も近い。

麦草峠に二時半着。夏場はバスも通う広い峠である。

急にスキーヤーが大勢あらわれたが、どういう訳か下手ばかりで、止まる時には大旨転がっている。回転は一応テレマークが試みられていた。

峠から東に下って、白駒池の入り口まで来ると、針葉樹林の中の一本道を大勢のスキーヤーが行き交う。みんな貸スキーで、今夜の宿である青苔荘のマークが入っていて、レンタルは三時間で千円とのこと。スキーの種類はディサタンス用で巾は狭く、踵が上るばかりでなく横にズレ出てしまう代物である。

若手が山崎さんに聞いた。「先輩はテレマークでしたか」「よせよ、俺はそんなに古くないよ。でも革製のビンディングで、踵は上ったよ。その後のカンダハーでも結構踵は上ったしね」「神田派ってなんですか？」「こう……カネのスプリングでね。ウーン！」

北八ツ岳最大の白駒池は、スカブラの波で真白だった。北岸の陽当りの良い青苔荘に三時二十五分着。小部屋十五ほどに食堂・大広間が付いた赤いトタン屋根の山小屋で、一泊二食付五千円であった。

小屋番氏は、東京の大学を出ましたと言う感じの三十才ばかりで、地元出身らしい働き者の嫁さんと、パパにまつわりつく三才の坊やとの共働きで、明るい雰囲気が好ましい。

早速、飲もうと寒い一室に上り込んだ。座卓の上にシーバスリーガル・オールドパー・

バーボンのアーリィタイムスを林立させ、その間にツマミが山と積まれ、やがてその山からタコ酢が現われると、期せずして「お正月だー」の声が出る。十五分もすると窓ガラスが曇り、外が見えなくなった。彼岸と正月が一諸になった熱は高かった。かくして、翌早朝のハレー彗星見学は出来なかったことが唯一の心残りとなった。

翌二十二日（土）、七時五十分青苔荘発。最初のピッチは稜線の高見石まで、百五十米の高差を登りなおすことから始まった。ゆるやかな踏み跡が樹林帯の中に続く。トップの年輩組がゆっくり歩くので、若手組は大声でしゃべり乍ら登る。尾根に出ると年輩組も声が出るようになったが、山崎さんが小生のコンパスから憶い出したのか中村賛治さんの話から始めたので、物故会員ばかりが話題となった。お通夜と結婚式が合同パーティーを組めばこんなものになるだろう。

雪深い高見石小屋着が八時二十分。さらに、短かい二ピッチで中山に至る。今日は高曇りだが中部山岳は全て見えている。進行方向に天狗岳が高度感をもって迫って来た。

中山で早期帰京の米田君と別れ、一行四人は天狗岳の基部に至りアンゼンをつける。急に手足の皮膚が「山」を憶い出してピリピリ反応するのが妙である。

山本君が八本爪のアイゼンは始めて見ましたと言って眼鏡の中の目を丸くすれば、年輩組も厚板板金を打ち抜いて爪の部分を下に曲げたような十二本歯には恐れ入った。

「そんなに爪が前にとび出したら、引っ掛って歩きにくいだろう？」

「いいえ！爪が先になかったら歩きにくくないですか？」

話しているうちに、鑄掛け屋さんが熔接したような古い爪が、何となく頼りなくなってきた。

赤岳小屋まで行く引地・山本両君を先に出発させる。時折、山頂に霧が舞い、秩父方面が黒い雲に包まれだしたからである。ちなみに、この時間に関東南部は雨になっていたと言う。

漸くピッケルが本来の働きを始めたが、足場はバケツで安全である。小生の「シャルレの穴あき」は、当世流のピッケルと比較しても、そのヘッドの形状は殆んど変らないが、全長七十五センチで木目の縦のラインが美しい。しかし、傍目には異様に映るようだ。六十センチ弱のアルミ・シャフトを使っている若い人の見る目は、丁度小生が一メートルもののウインパー愛用のピッケルを見た時と同じ感じなのだろう。

天狗岳東峯頂上での四十分は、急に風も途絶え、三月の軟かい日照に恵まれてヤッケも不要であった。引地・山本両君は、もう根石岳から夏沢峠の下りに入ったのだろう、すでに視界から消えていた。「このところ、山頂に来る度に、一期一会の心境でね」との山崎さんの言葉に何となく後髪をひかれながら、十二時二十分に頂上を辞した。

下りは早かった。体重増を衰えた心肺機能に鞭打っての登りは遅いが、下りは足腰だけだから楽だ。

黒百合ヒュッテから、五万分の一の地図には無い道が渋の湯まで通じていた。登りの人

々が、二人の年令に敬意を表したのか、尻当てまでひるがえした博物館的迫力に恐れをなしたのか、道をゆずってくれた。

タクシーと空いた特急を乗り継いで、夕刻六時には横浜に帰っていた。

（追記）翌二十三日の関東南部は大雪に見舞われた。引地・山本両君は、吹雪の赤岳から茅野駅に下山したが、中央本線が不通となり、名古屋廻りで二十四日の朝四時に東京に帰着した旨、月曜日の朝の事務所まで米田君から電話があった。ご苦労様でした。

僕が休暇中にやった事

引地　真

僕は一九八二年九月から三年間、中国の天津の塘沽という小さな町で暮らしてきた。渤海湾の海底油田堀削事業の資材担当者のひとりとして、何もない汚れた町で、退屈と焦燥の日々を送っていた。生活は単調で刺激に乏しく、中国人といっしょの仕事は焦慮と失意に満ちていた。その中で唯一の救いは、わりとまとまった休暇が一年に二回取れることだった。また、塘沽では買うべき品物はほとんどなく、食堂の食事はとてもまずいので自炊に頼らざるを得ず、結果的にある程度金銭的余裕が生じてきた。そのためそのヒマと金を利用して、日本でサラリーマン生活をしていた頃には考えも出来なかった場所を旅行することができた。現地駐在三年間で六回の休暇があり、そのそれぞれが印象的で、心ときめく経験だった。すなわち、僕は塘沽では、それまでの休暇中のことを反すうし、次の休暇にすることを考えながら時をやり過ごすという非常に暗い日々を送っていた。

日本に帰ってきてから約一ヵ月。日本のテンポにとまどい、なじめない自分に気が付く。資本主義世界の激烈なビジネス社会の中で、浦島太郎になった僕は、ここで龍宮城の生活――休暇のときやった六つの旅――の思い出にひたってみよう。

第一回　内モンゴル

（八二年三月十九日―四月十四日）

海水が凍り、真白になった海面のなかで、船の通った跡だけが氷がなくなり、水が黒く見えている。そんな厳しい冬の寒さもようやく少し緩みかけた頃、僕の最初の休暇が取れた。

それまでの六ヵ月間で少し言葉も覚えたし、中国の生活にも慣れたので、僕は中国の山を登りたかった。しかし、この国の諸々の事情のため、それは断念しなければならなかった。そこで、ぼくは内モンゴルを旅行することに決めた。読んだ本の影響で、中国の少数民族に興味をもっていたのと、「モンゴル」という言葉にロマンを感じていたからだった。

僕は最もモンゴルらしさが残っていると言われているシリンホトへ行こうとした。ところが天津公安局はシリンホトへの旅行証を出してくれない。未解放だからということだが、僕が日本から持って来た地図ではシリンホトは解放都市を示す赤印で表されている。中国人は一度言ったことはほとんど曲げないため、僕は天津で旅行証を取ることをあきらめ、とりあえず内モンゴル自治区の首都のフホホトまで行って、そこでシリンホトまでの旅行証を取ろうと考えた。というのも、中国では法律や規則が全国には徹底していなくて、地方によって言うことが変わってくる。概ね北京に近づくほど厳しく、逆に離れるほど、特に南に行くほど甘くなっている。だから天津の公安局はダメだと言っても、フホホトの公安局ならOKと言う可能性もある。

三月十九日、塘沽を列車で出発した。北京で夜行列車に乗り換え、翌日朝九時にフホホトに着いた。とりあえずシリンホトまでの旅行証の取得と飛行機の便の状況を尋ねるため旅行社を訪ねることにした。そして約二時間市内をウロウロ歩き回ったあげく、ようやく旅行社にたどりついた。

旅行社の人の返事はつれないものだった。

「シリンホトに行きたいんだけど……」と僕。

「ダメだ。ムリだ。それよりお前、今日の午後から草原ツアーに行かないか。」

「草原？」

「そうだ。草原へ行って包に泊まり、ラクダに乗り馬にも乗る。いいぞ。それに値段も格安だ。これに決めろ。」

「でも……」

「今日午後、香港人三人といっしょに出発だ。ガイドも付くし、三食付きだ。決めたな。」

「わかった。」

というような会話に乗せられて、僕はあっさりとシリンホトをあきらめ、草原ツアーに参加することに決めた。

午後一時、香港からの旅行者三人といっしょに出発した。途中、王昭君の墓と言われるところに寄った後、車はフホホトの市内を離れ、禿山の連なる小さな山岳地帯にはいって行く。そこを登り切ると視界が一気に広がった。一面見渡すかぎりの草原が広がっている。その中の一本道を砂煙をあげながら約三時間走ったところが僕たちの目的地ウラントガ集落だった。

ウラントガは草原の中の小さな集落で、中心に古いラマ教の寺院がある。しかし、そのラマ教の寺院には僧もいず、すでに廃屋となっていた。そのすぐ横に旅行社はモンゴル式テントを設置していて、外国人観光客を泊めるようにしている。

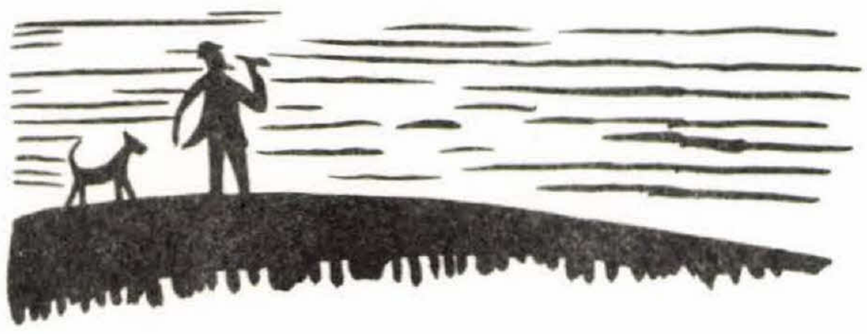
その夜の食事は、油のくさい羊の焼き肉、硬いパン、しょっぱいバター茶というモンゴル料理を楽しんだ。また、翌日は草原でラクダや馬に乗ったり、モンゴル族の家庭を訪問したりした後、フホホト市内へ帰った。

この草原ツアーは、国営の旅行社がセットしたもので、外国人旅行者からの外貨獲得がその大きな目的となっている。従って、僕たちに応対してくれた人たちは、すべて国家のメガネにかなった人たちだし、中国旅行はどこでもそうだが、その人たちが外国人に対して言うことは決まりきっている。そんなお仕

着せの旅行だったけれど、自然の美しさにうそはない。早朝、草原でキジを打ちながら、地平線から昇る朝日を見た時、これは僕の生涯で最も印象深いキジ打ちであったと言わなければならない。

その後、大同へ行ったが、そこでは完全な観光旅行、名所旧跡巡りだったので、ここでは割愛したい。ただ、雲崗の石窟には、思わず「すごい」とうなってしまった。

それから日本に帰り、桜の咲く季節の休暇を楽しんだ。



第二回　ボゴダ峰

—シルク・ロードの山—

（八三年七月二五日—八月二四日）

1　中国での登山

中国には外国人が勝手に行って登れる山はない。泰山や、黄山のような完全な観光地となったところでも、事前に旅行証の取得が必要で（最近は旅行証不要のところも増えている）、まして少しでも辺境の山となれば、まず旅行証が発行されることはない。特にコネのない普通の人がそういう山へ合法的に行く唯一の方法は、中国登山協会を通して登山隊としての許可を得ること、または、そのような登山隊に参加することだ。そして、僕は日本山岳会のボゴダ峰登山隊に参加することを決めた。

ボゴダ峰は、主峰は海抜五四四五メートル、中国の新彊ウイグル自治区阜康県にあり、天山山脈東部の最高峰である。そして、中国が一九八〇年外国に開放した八峰のひとつでもある。

日本山岳会学生部は、一九八一年より連続五年間のボゴダ峰の登山許可を得た。第一年目の八一年には、主峰の登頂に成功し、第二年目には、ボゴダII峰（五三六二メートル）を初登した。第三年目にあたる一九八三年には、日本山岳会関西支部が中心となり、ボゴダII峰から主峰への縦走を目指す登山隊が組織された。僕はこの登山隊のメンバーとしてボゴダ峰を訪れる機会を得た。

七月二六日、僕は北京空港から中国民航のウルムチ行きイリューシン機にひとりで乗りこんだ。僕は仕事の都合で、本隊より約一週間遅れて、ひとりで入山することになっていた。そして、ひとりで行動したことにより、シルク・ロードの山と人により強く触れることができたと思う。

さて、機内には明らかに漢族とは違う容貌をして、耳慣れない言葉を話す人たちが目についた。西域に暮らす人々だった。僕はこれから訪れる土地の歴史を思い起こした。古来文明の十字路と呼ばれ、数々の遊牧民族の興亡と隊商たちの土地。NHKの「シルク・ロ

ード」の世界が僕の前にあるのだ。（これが僕が中国へ赴任する事をふたつ返事で引受させた原因だ。おかげで、後悔することになったが……）

中国での登山は、すべて中国登山協会が窓口となり、中国国内での移動のすべての手配を中国登山協会とその支部が行うことになっている。それらの料金はタリフで決められており、事前に提出した行程表に基づいて算出した総予算額は登山開始前に支払われなければならない。もし、予定とは違った行動をとった場合は、その費用の差額を北京に戻ってきた時精算しなければならない。そして、登山協会は宴会の後にその精算をするようにしている。その結果、飲んべえの登山隊は酔っぱらって、相手の差し出す決算書によく注意せずサインすることになる。

2　アプローチ

さて、僕はウルムチ空港で新彊登山協会に迎えられ、市内のホテルにはいった後、さっそく市内見物に出掛けた。街の雰囲気が、漢族の街とは違う。美しいウイグル族の女性が目につく。紅毛碧眼の彼女たちは、鮮やかな民族衣装を身にまとい、原色のスカーフで髪をおっている。彼女たちの祖先は、唐代長安の都を胡旋舞で魅了した胡姫だ。暗い単色の漢族の街に住んでいる僕には、原色の鮮やかさがとても新鮮に感じられた。バザールでは香辛料の効いた羊の焼肉や、メロンを食べたりした。

明くる二七日、いよいよ天山山脈へ向かう。ウルムチからボゴダ峰の麓の天池までは、車で約三時間だ。ウルムチの市街を過ぎると、広大な砂漠地帯が広がっている。その中の一本道を日本製の車ですっとばして行く。南側の砂れきのむこうにボゴダ峰の姿が見えた。暑熱の砂漠地帯の中に浮かぶ氷雪の山は、遠く小さく見えたが、久し振りに見る岩と氷の世界に心がふるえるのを感じた。

十三時二〇分、天池に着いた。天池は標高一九八〇メートル。この辺りでは唯一の森林地帯で、針葉樹の林がまわりに茂っている。かなり観光化されていて、夏の上高地を思わせるような賑わいだった。

十五時にボートに乗って、天池を北から南へ渡った。僕は、実は、まったくのひとりで入山したわけではない。新彊登山協会の王海涵さんが同行してくれた。彼は今年二七歳で、小柄だががっしりした体格の漢族の青年だ。彼は日本語もうまく、そのうえウイグル語、カザフ語も少し話せる。仲間として申し分ない。

歩き始めるとすぐにカザフ族のテントがあった。その前を通りすぎようとした時、テントの中からまず子供が、次に主人が出てきて、寄っていけとさかんにすすめる。僕はもの珍しさもあって、中にはいってみた。カザフ族のテントも、モンゴル族のテントとその造りは同じだ。木の枠にウールの布を張った半球型のものだが、ただ内部の装飾は違っている。カザフ族のテントの内部は、特徴のある美しい刺繍された布で飾られている。彼らが端の欠けた汚い茶碗にすすめてくれたお茶は、羊のミルクがはいったもので、飲むとしょっぱい味がした。バターがはいっていないだけモ

ンゴルで飲んだものより飲みやすかった。

彼らのテントから、さらに二時間歩いたところで僕たちのテントを張ることにした。僕の高度計は二五〇〇メートルを指していた。時刻は十九時二五分だったけれど、これは北京時間なので、まだ太陽は西の空に輝いていた。中国では、全国すべて北京時間を用いている。しかし、実際にはウルムチでは日没は北京より二時間半も遅いのだ。

翌日も良い天気だった。今回僕のとるルートは、天池から僕たちのBC（南路大本営）への最短ルートとなる。先行した本隊は比較的ゆるやかなルートをとり、天池から五日間かかった。一方、僕は王さんと二人旅で身軽なので、天池から最もダイレクトなルートをとることにした。それは、将軍溝から以肯起山口（三七六〇メートル）を越え、グラチマイロ氷河上の北路大本営（三五八〇メートル）に達し、グルバン・ボグド谷を少し下り、そこから支谷へはいり、メルツバッヘルのコル（四二二〇メートル）を越え、チゴ氷河に降り、その舌端の南路大本営（三四二〇メートル）に達するルートだ。天池から二日半の行程だ。

将軍溝は出だしから急登だった。しかし、明るくひらけたこの谷は、草原やお花畑が広がっていて、カザフ族の絶好の放牧地になっている。振り返ると天池が朝日を受けて輝いていて、まさに「天山の真珠」そのものだ。谷の途中で放牧をしているカザフ族のテントに又さそわれた。彼らは本当にひとなつっこい。常によそよそしく、陰気な表情を浮かべている漢族とは、とても違っている。彼らは僕にカザフ式のお茶とナン、羊のヨーグルトとチーズをごちそうしてくれた。

彼らのテントから上部は、少し傾斜も緩くなり、広い谷いっぱいに草原が広がり、高山植物が咲き乱れ、その真ん中を水が流れている。行く手には氷に飾られた山が見える。そんな美しい別天地のような場所を、僕は羊飼のかすかな踏み跡をたどり、可憐な高山植物と大きな馬の糞を踏みつけないように、たえず足元に注意しながら歩いた。

十六時、以肯起山口にたどりついた。前方にボゴダ三山（主峰五四四五メートル、中央峰五二八七メートル、西峰五二一三メートル）が大きな北西壁を見せて、かまえていた。そのすそに幅広いグラチマイロ氷河が青く横たわっていた。その氷河の端に北路大本営が見えた。このあたりにも踏み跡があり、カザフ族の行動半径の広さに驚かされた。

翌日は標高四二二〇メートルのメルツバッヘルのコルを越えて、いよいよBCにはいる。

この日は朝から小雨が降っていた。北路大本営からブルガン・ボグド谷を少し下ってから、コルへ支谷を登り始めた。三七〇〇メートルを過ぎ、富士山の高さを越えたあたりから、傾斜も一段ときつくなった。足元も崩れやすく歩きにくくなり、このあたりで、僕の疲労も激しくなった。コルまでの最後の四〇〇メートルの登りに、約三時間もかかってしまった。初めて体験する高度のせいか、それとも日頃の運動不足のせいか、とにかくバテバテになってしまった。特に頭痛がするとか、息が苦しいとかは感じなかったが、なにしろバテバテになっていたうえに、コルでは立っ

て歩くこともできないくらいの強風が吹いていて、実際自分の体調を気にしたりする余裕などなかったのだ。

長い下りのすえ、チゴ氷河におりたったところに隊長の上原さんが迎えに来てくれていたのを見た時は、本当にうれしかった。氷河湖のほとりのBCに着いたのは、二一時十分。ようやく空が暗くなりかけた頃だった。

3 登山活動

僕以外の隊員は七月二六日にBCの設営を完了していて、翌日から登山活動を開始していた。そして、早々にボゴダII峰の登頂はあきらめ、まず南面からのボゴダ主峰の登頂を第一の目標にすることにしていた。

七月三〇日にはチゴ氷河源頭四〇〇〇メートル地点にC1が設けられた。そして、主峰とティルマンのピークとのあいだのコルをめざして、氷雪壁にルートを伸ばし、八月四日、そのコルにC2を作った。C2から主峰への稜線は急峻なナイフ・リッジとなっており、両側とも二〇〇〇メートル程スパッと切れ落ちている。岩と雪のミックス稜は困難で、雪庇が南北両側に代わる代わる張り出している。そのようなルートの困難さに加えて悪天候が続き、ルートは進まなくなった。前衛峰の手前にC3を作りチャンスを狙ったが、決められた下山予定日が迫ってきた。

4 敗退

標高四七〇〇メートルのC2のテントの中、僕の隣で隊長の上原さんがトランシーバーで登頂の断念を伝えていた。八月一一日の午前の事だった。外の風雪は止みそうになかった。僕は上原さんの残念そうな口調を、複雑な気持ちで聞いていた。実際、僕はボゴダの頂上に対して、それほどの執着はなかった。C3から上の切り立ったリッジは圧倒的で、いまで以上の厳しい登攀を強いられることは明らかだった。僕の力で登りきれるか不安だった。又、そのような厳しい登攀は僕が期待していたものではなかった。僕はもっと気楽な山登りを期待していたのだ。

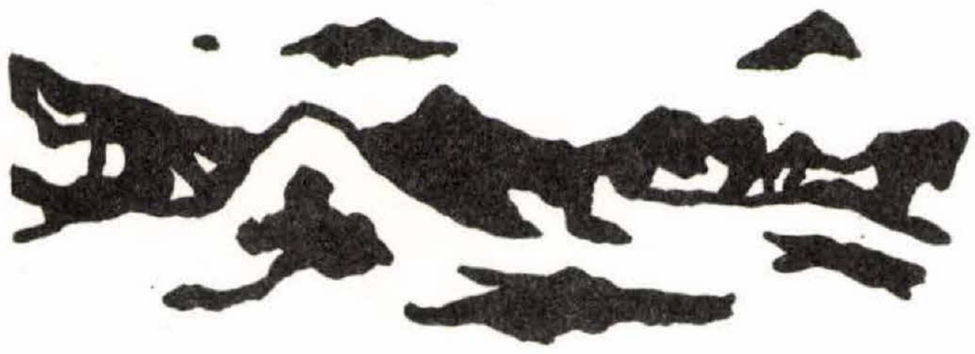
更に、この登山に対して、日本での色々な準備活動にまったく関わらなかったし、参加したメンバーとは全て初対面だった。そのため隊全体の雰囲気になんとなく馴染めないものがあり、ピークに対しての意欲もあまり起こらなかった。やはり登山は計画段階から参加し、気心の知り合った者と行くのが最もおもしろい。そのことを今回のボゴダ登山で思い知らされた。従って、僕が今楽しく思い起こせることは、失敗に終わった登山活動よりも、一人で歩けた入山時のことだ。

とにかく、この登山は四八五〇メートルの前衛峰を最高到達点として敗退する事になった。悪天候が続いたこともあったが、結局はそれだけの力しかなかったからだろう。また、メンバー間の意志の疎通も完全ではなかった。僕以外の人達も皆初めての海外登山で、ボゴダのために集まった寄せ集め隊だったので、隊全体にまとまりがなく、登っていても、お互いどこかぎくしゃくしていた。約一ヵ月いっしょに登ってみて、漸くお互いに解りあえてきた時は、既に天池に下山していた時だった。この次このメンバーで適当な山へ行った

ならきっと実り多い登山になるだろう。

けれど、僕にとっては良い経験になった。

初めて海外登山隊に参加して、初めて富士山の高度を越え、初めて氷河の上を歩き、初めてのちゃんとした極地法で、初対面の人達ばかりと、初トレースのルートを登ろうとしたのだ。この初ものづくしの経験は、やはり得難いものだと言えるだろう。又、中国登山協会の人達とコネを作れたことも次の休暇の計画につながった。



第三回 チベット

（八四年三月一日―二九日）

ボゴダ登山を終わって他のメンバーはカシュガルに行くことになっていた。僕は休暇の日数が限られているので、彼らとはウルムチで別れて一人でトルファンを旅行した。風雪に苦しめられたボゴダからいきなり暑熱のトルファンに来て、不思議な感覚だったが、僕は大きな解放感を感じた。ウイグルの人達と話しているとそこが中国の一部だとは思えなくなり、中国語（漢語）で話していることが奇異に感じられた。

再び北京に戻って来た時、僕の次の休暇の過ごし方は決まっていた。中国登山協会へ下山の挨拶に行った時、僕は翌年春のチベットのトレッキングを申し入れた。

塘沽に戻ってすぐに僕は正式な申請書を出した。その時の第一希望はグルラ・マンダータ、カイラス山群、第二希望はナムチャバルワ山群だったが、いずれも当時は外国人には未開放の地域だった。そして、十一月になって中国登山協会から返事が届いた。これらの地域は未開放だから認められないと言うものだった。僕は北京まで出掛けて交渉した結果、シシャパンマの許可は得ることができた。そこは僕が第三希望として申請していた場所だった。

次の問題はメンバーだった。針葉樹会のだれかが来てくれれば最高だったのだが、中国の登山が高くつくことは有名だし、一ヵ月も休暇を取れる会社はそんなに多くない。結局、同じ日中石油開発で働く清水さんが同行してくれることになった。彼は山登りの経験はあまりないが、若くて比較的体力もあり、気持ちのいい性格をしている。又、神戸外語大の中国語を卒業しているので中国語には問題無く、通訳を雇う必要がなくなったので、その分費用を節約することができた。

一九八四年三月三日午前五時、まだ真っ暗な成都の街を車は走って行く。ヘッドライトを点けずに走る車の傍らを馬車やジョギングをする人達が行き過ぎる。僕達はラサへ行く飛行機に乗るために四川省の成都空港へ向か

っていた。険しいチベット高原を飛ぶ飛行機は、天候の安定している午前中にラサから折返して成都に戻ってこれるように、早朝に成都を出発する。

僕達の乗ったボーイング707型機には、ナムチャバルワを目指す中国隊、チョモランマを目指すイギリス隊も乗っていた。中国隊のメンバーには、いままで一度も山に登ったことはなかったが体が山登り向きだと言われて登山隊員に指名された者や、年若い女の子がいたりしてびっくりさせられた。又、イギリス隊は、後で判ったことだが、対テロ工作で有名な英国陸軍特殊部隊（SAS）の隊だった。どうりで皆無口でとっつきにくそうだった。

夜明けの成都を出発するとすぐ、ミニアコンカの姿が見える。この横断山脈の最高峰は朝もやの雲の上にひとりピラミダルな山容を顕していた。そして機はチベット東部の山岳地帯の上空を飛んで行く。すると中国隊の中に歓声が起こった。ナムチャバルワが見えて来たのだ。ツァンポー河の大屈曲点の内側にあるこの未踏峰は、七七五六メートルの頂きを僕達の乗っている飛行機の横に（下にではない）光らせていた。雲が切れてくると、眼下に氷雪を戴いた山々が連なっていた。僕はおもわず興奮した。おそらくそのほとんどが未踏だと思われる峰々が窓のすぐ下に見えた。それらの山々に代わって砂漠のような砂が広がってきた時、機は高度を下げラサのコンガ空港に着陸した。

空港からラサ市内までは約二時間もうもうたる砂煙をあげるオンボロバスに揺られて到着した。バスを降りてザックを背負うとした時、急に頭がふらふらして足下がよろめいてしまった。ラサの標高は約三七〇〇メートルで、飛行機で一気にこの高度まで来ると、しばらくは体が慣れないらしい。ふらつきながら部屋まで荷物を運びこむとすぐにベッドに横になった。清水さんも同じように苦しそうにしてしばらく横になった。ラサの宿舎は交通部の招待所で部屋には机とベッドがあるだけだ。体を拭くための洗面器一杯の湯と欠くことのできない魔法瓶にはいった熱い湯が唯一のサービスだった。

二時間程して、少し楽になったのでラサの市街に出掛けてみた。この日はたまたまチベット暦の正月だったので、家々の窓には新しい布飾りが飾られ、いくつかの色の新しい旗が屋根の上にはためいていた。ラサの象徴ポタラ宮はマルポリの丘の上に雄大で荘厳にそびえていた。周りの寒々とした風景の中に、とびぬけてそそり立っていた。ポタラ宮は僕が中国で見て最も感動した建造物のひとつで、もうひとつそれに匹敵するのは万里の長城だけだった。

夕方になって、僕達の連絡官がやってきた。チベット登山協会のガチュウさんと言うチベット族の人だ。いい靴を履いているので聞いてみると、メスナーにもらったと事も無げに言った。八一年のメスナーのシシャパンマ隊に参加したらしい。

翌朝中国製のランド・クルーザーに荷物を積んで出発した。できるならばラサでゆっくり高度順応をはかりたかったが、ラサでは一泊ひとり二四〇元（当時のレートで約二万八

千円）かかり、さらにラサでは自分の家に泊まっている連絡官の分も同じだけ支払わなければならないので、一刻も早くそんな金のかかる所から逃げ出したかった。中国で登山をする場合、いつもその費用の高さが最も問題になる。僕達のような少人数で完全なプライベートのチームにとっては、少しでも無駄と思われる費用は切り詰めようとすることは仕方の無いことだと思う。そして、今回それがあだとなった。

初日の行程はシガツェまで。ラサから南に出てヤムドク湖、ギャンツェを経る道は工事中なので、ニェンチンタングラの麓を通る北まわりの道をとった。ラサを出て青蔵公路をしばらく行くと、ニェンチンタングラ（七〇八八メートル）が見える。本当に七〇〇〇メートル峰なのだろうかと不思議に思ったほど近くに見えた。おそらく、チベットの平均高度が四五〇〇メートル以上もあることと、まわりの雄大な景色のため実際の大きさをつかむ感覚が鈍っていたからだろう。ニェンチンタングラの南はヤンパーチンという草原が広がっていて、地熱発電のやぐらが見え、白い湯気があがっている。チベット人にはふたつのタイプがあり、このあたりに住むチベット人は、農耕民族ではなく、放牧を営む騎馬民族である。特徴のある大きな毛皮の帽子をかぶり、馬に乗って、僕達の車の横を走っていった。

やがて道は九十九折りに岩山を登って行った。今回の最高地点五三〇〇メートルのシュエグラ峠に着いた。峠には石を積んだケルンのようなものとたくさんの経文を結んだ旗が立てられており、強い風にゆられながら巡礼の旅人の安全を祈願していた。

峠を下り、ツァンポー河を渡し船でわたると、道はツァンポー河に沿って進む。景色は一転して砂漠のようになった。風が吹くとひどい砂ぼこりで前が見えなくなり、車の中にいても、僕達の体は砂まみれになってしまった。そして道のわきには泥レンガで作られた電信柱が連なっている。すれちがう車はほとんどない。木はまったくない。

夕刻、シガツェに到着した。シガツェはラサに次ぐチベット第二の都会だ。現存するチベット最大の寺院タシルンポはここにある（ポタラを寺院と見なさないならば）。パンチェン・ラマがタシルンポの住職だった（現在は北京にいる）ため、シガツェは中部チベットの政治、宗教の中心地となっている。

ここの標高は三八八〇メートル。そして一泊ひとり一二〇元（約一万四千円）かかるが僕達は連絡官と運転手の分も負担しなくてはならないので、かなりの費用だ。山の中でテントにはいるまで僕達の心休まる場所は無いようだ。

翌朝もあわただしく出発した。この日はシガールまで殺風景なチベット高原を走った。思えばこの日、僕は体の不調を自覚した。頭が重く車の中で座っていることすら少し苦しく感じられた。しかし、四五〇〇メートルのツォーラ峠を越えてラズーに着いた時は、歩き回ることができたし、途中で昼食をとった時食欲が無かったのは食い物がまずいせいだと思っていた。

五二五〇メートルのカツォーラ峠を越えてもうもうたる砂煙の中シガールに着いた。最果ての町といった感じの所で、この町に住んでいる人達は一体何で生活しているのか不思議になってくる。ラサやシガツェの宿舎では夜中の数時間は電灯がついたが、ここではローソクの灯に頼らなければならない。

「ちょっと町を見に行きませんか」と清水さんに誘われたが、僕は少し気持ち悪かったので断った。清水さんが出掛けた後、僕は少し横になれば良くなるだろうと思って、ベッドの上に倒れこんだ。それから一日半の僕の記憶はぷっつり途切れている。

僕は高山病に倒れた。それも相当重い症状だったそうだ。僕が昏睡状態におちいっているのを発見した清水さんと連絡官のガチュウさんは精一杯の手当てをしてくれた。酸素ボンベの酸素を吸わせたり、シガールの診療所に運びこんでくれたらしい。僕の意識が戻ってきたのは三月七日の昼頃。約四〇時間も意識を失っていたことになる。シガールからシガツェに戻る車の中で、空気枕のような酸素袋から酸素を吸わしてもらっているのに気付いた僕は、自分がいまで意識を失っていたことなど分からなくて、車は次の目的地のニャラムに向かっているものだと思い込んでいた。もうろうとした意識のままシガツェの町に着いた時、見覚えのある街並みに驚いた。病院に担ぎこまれた時も、僕がそんなに重度の高山病だとは理解できなかった。と言うより、理解できないくらい重度だったと言った方がふさわしいだろう。なにしろ両側から肩を借りなければ歩けなかったほどだった。

僕はシガツェの病院で四日間入院した。その間、それまでの人生でされたよりも多くの注射をされ、点滴を受け、酸素を吸わされた。チベット族の若い看護婦さんが何時間か毎に僕の病室にやってきて、太い注射を何本も腕や尻にぶすぶすと刺すたびに、僕は遠藤幸吉のように「いてて」と声をあげていた。おかげで看護婦さんたちとは、すっかり仲良くなってしまった。彼女達は整った顔立ちをしており、きれいな髪飾りや、イヤリング、ブレスレット等を身に着けていた。

入院中はシガツェの世話役の胡さんがいろいろと面倒をみてくれた。毎日僕の所へ食事を運んでくれたのも彼だった。また、清水さんとガチュウさん、そして運転手のスナンピンズゥさんにはとても迷惑を掛けたのに、いろいろと親身になって世話をしてくれた。彼らの献身のおかげで、僕は順調に恢復した。

高山病の原因ははっきりしている。ラサ、シガツェ、シガールと一日の休みも取らずに車で進んだことだ。その間五〇〇〇メートル以上の峠を二つ越えている。費用を節約するためを思って無理な計画を作り、かえって本来の目的が台無しになってしまった。考えの甘さと言うしかない。

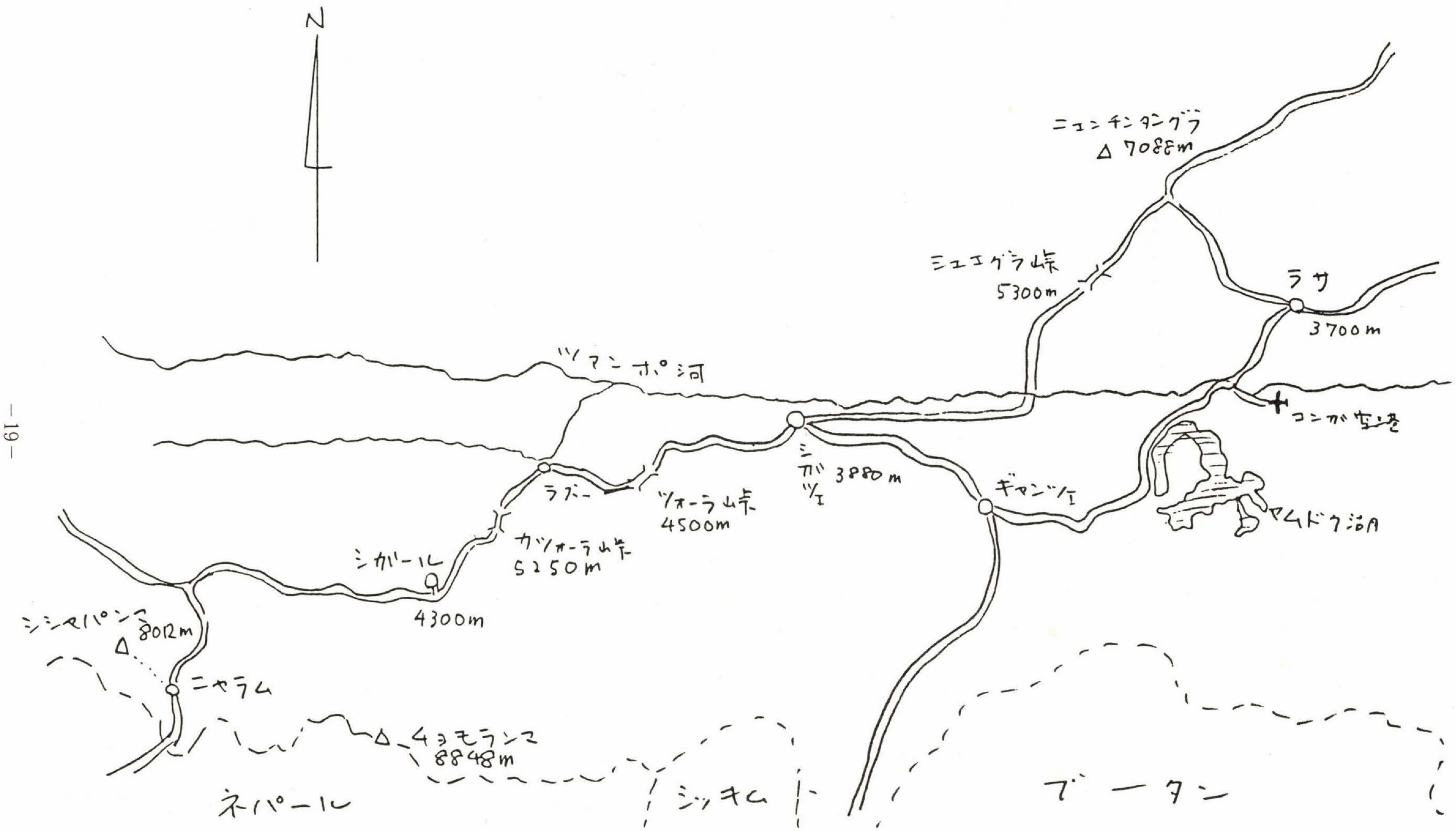
退院してもトレッキングを続けることは止められた。僕達は山に触れることなく、戻らなくてはならなかった。せめて一通りの観光だけはして帰ろうと、シガツェのタシルンポ

寺院、ラサのポタラ宮、ノルブリンガ、チョカン寺等は見て来た。そして、成都、広州、香港経由で、日本に戻った。その時、広州では五二年卒の兵藤さんには大変御世話になったことは忘れていません。

結局、僕の高山病のため、僕達はシガツェからシガールへの道で、遠くの方にかすかにヒマラヤ山脈を見ただけで実際の山歩きは全くできずに帰って来た。特に清水さんには、僕のほうから誘っただけに、申し訳ない気持ちで一杯だ。しかし、ほとんど訪れるチャンスのないチベットに行けたことはラッキーだった。中華人民共和国の一部となったチベットを見れたことは、同じ中華人民共和国に住み、中国と関わりを持つ者にとっては、興味深い事だった。

今のチベットを語る際、中国共産党による統治を「解放」と呼ぶか「侵略」と呼ぶか二つの立場に分かれる。そして、登山者の書いた大抵の文章は後者の立場に立っている。これは、僕が思うに、中国式の無責任なアレンジや法外な料金、外国人に対する過干渉と特別扱い、登山者を受け入れる中国側の担当者の登山活動に対する無知無理解と紋切り型の受け答え等（これらは登山に限らずあらゆる分野に於いて言えることだと中国で生活しているとわかる）が、自由気儘を大切にする登山者の気持ちに反するため、彼らをして中国嫌いにさせてしまうところが大きいのだろう。また、ダライ・ラマ統治時代のチベットをロマンチックに、エキゾチックに描いた書物の影響も少なからずあるだろう。それに付け加えて、文化大革命中に破壊された寺院や仏像の残骸が確信を与えることになる。ただ、それらだけを見て、現代の世界でチベットだけ前近代的社会に止まるよう要求する権利は僕達にはない。文化大革命という一種の内乱はチベットに限らず中国全土を吹き荒れたのだし、その後遺症は中国全土にくっきりと残っている。また、チベット人の生活や考え方を僕達はどれだけ知っているだろうか。

チベット人にとって、ラマ教は生活そのものと言ってよく、それを否定することは生存を否定することと同じだ。僕はラサのリンコルやパルコル、シガツェのタシルンポへの道で五体投地の礼をするチベット人を多く見た。彼らは一歩毎に両膝、両肘、頭を地面につけて体を投げ出して進んでゆく。歩けば二〇分で回れるパルコルの道を彼らは二日半かけて回るという。また、地方からは半年、一年以上もかけてラサまで巡礼に来る者もいる。彼を送り出す村では、巡礼に行けない村人達が何十年も働いて蓄えた金や高価な銀の針を彼に託し、ラサの寺院に寄進してもらうと聞いた。ラサのチョカン寺ではそういった巡礼達が列をなしており、オムマニベメフムと念仏を唱える者、五体投地の礼を何百回、何千回と繰り返す者がいた。このような狂信的といえるような宗教的生活態度は僕の理解を完全に越えている。また、その反対に、僕達の連絡官だったガチュウさんはチベット族だが自ら無宗教だと言い、人民服（中山服）を着ている。彼のようなチベット人も少なからずいることも事実だ。僕は彼のような人達を買弁と呼ぶべきだろうか、それとも進歩派と呼ぶべきだろうか。


N
ニュンチンタングラ
△ 7088m
ミュエグラ峠
5300m
ラサ
3700m
ツアンポ河
コンガ空港
シガツェ 3880m
ラズー
ツォーラ山峠
4500m
カツォーラ山峠
5250m
ギャンツェ
ヤムドク湖
シガール
4300m
シシャパンマ
△ 8012m
ニャラム
△ チョモランマ
8848m
ネパール
シッキム
ブータン

N
Restaurant
天池
1980
村人
Village
東湖
天池
中央湖
ケンボウ
ケンボウ
ケンボウ

編集後記

まずは、発行の遅れましたことを、お詫び致します。

今回は、三年ぶりに中国大陸より帰国された引地OB（昭55年卒）の波乱に富む、中国大陸漫遊記の一挙掲載となりました。

夏山シーズン開幕を前に、皆様各種山行を御計画のことと存じます。最近の山行手記、あるいは懐古録、等積極的に御投稿下さい。

宮下　克彦
〒二七三
船橋市前貝塚町二六六―三
（TEL）　〇四七四（三八）五六九一